
大地主と大魔女の庭園

冴草みつな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大地主と大魔女の庭園

【Nコード】

N4787S

【作者名】

冴草みつな

【あらすじ】

「大地主と大魔女の娘」の拍手小話をまとめました。

すみませんがタイトル変更しました。本編ラストが作者の中で出来上がり、こっちの方がじっくりくるな〜というわけです。

従者のささやかな反抗（前書き）

3 話目 前後かと。

従者のささやかな反抗

ジェントルマンの従者 VS どうにもならん主人

。。。。。。。。

「大魔女の娘よ。ちゃんと食事はとりましたか？」

「……しょ、く、じ？」

焦点の合わない瞳がこちらを見上げる。

小首を傾げてその言葉の意味を問うかのような口調に、こちらの胸が締め付けられた。

「そうですねよ。きちんと何か召し上がりましたか？」

「召し上がる」

「そうですね、何か食べましたか？」

「食べ、ました。前に」

「それはいつのことですか？」

「昨日よりも一日前」

それがどうかしたのかと言いたげに、少女はこちらを見ていた。毎日尋ねては同じような事を繰り返している。

まるで他人事のように淡々と告げる少女に、焦りを覚えない者がいるだろうか？

このままではいけない。

だからこそ、主人に事実をありのまま伝えたのだ。

「大げさだ」となじられたが、実際に少女を目の当たりにした主人は言葉も無い様子だった。

いつものやり取りを見ただけで、しかるべき処置を取るべく行動を起こしてくれた。

その強引さが自分には無い。

上に立つ者特有の、時としては傲慢とも取れる行動力に、あの時は感謝した。

彼女の身を思いやつてこそ、ためらいながらも実行に移すべきは「保護」だと誰もが思う事だろう。

大魔女が森の奥深くに慈しんできた、世にも稀な夜闇をまとう神秘的な美少女。

森に育まれた少女だが、今必要なのは人との関わりだろう。

例え少女が拒否しようとも。

。。。。。。

「あ」

「なあに？」

「ジルナ様。リヒヤエル様は、いつも来てくれた方です」
「そう」

庭を散策するジルナ様と少女とに出くわした。

お互い目が合うと微笑みあった。

にこにこしながら彼女が寄ってきてくれる。

可愛らしい。

そして冷気も同時に忍び寄って来た。

この春の日差しのごとき温かさに、背後の大寒波など他愛ないものだった。

無視を決め込む。

「ごきげんよう、大魔王の娘よ。お元気そうで何よりです。何かご不自由はございませんか？」

「ありがとうございます。不自由、ありません」

最後の不自由で彼女の眉が少し下がった。

嘘なのだろう。

彼女の不自由さは館内でも有名だ。

常に行動を見張られて、彼女は息が詰まる思いをしているに違いない。

何を口にしてもしなくても、主の小言をくらっている。

「そうですか。それは何よりです」

「あの、ありがとうございます。その、あの、ご不自由ではありませんか？」

「はい？ 私がですか？」

「はい」

神妙な面持ちで少女が頷いた。

「私のせいで不自由な想いはされていませんでしょうか？」

「何故？」

「私が話しかけると、皆様……困ったような顔をなさいます」

「そうですね。それは私にも言える事ですか？ 貴女様から話しかけられるなんて、光栄の極みですよ。もしそう感じたとしたならばそれは、みんな恐れ多くて怯むのです」

怯まずにこの眼差しに微笑めばよいものを。

僅かな反抗心を含ませて、少女の笑顔を堪能した。

「リヒヤ、エル様、いつも親切にして下さってありがとうございます。感謝、いたします」

たどたどしくも一生懸命に少女は言葉を紡いでくれる。

「リヒヤエル・エルンデ。長つたらしいのでどうかエルとお呼び下さい、エイメリイ様」

「お嬢さん、様？ 変なの！」

「いけませんか？」

最後にはいつも同じやり取りを交わす。

その度に彼女はいつも年相応の、はにかんだ笑顔を見せてくれるのだ。

今日もくすくす笑われた。

途端にこちらの心までがくすぐられたようだった。

そう。古語でそれはお嬢さんを意味する呼び方。

綺麗な娘に対して使われる、賞賛を込めた親しい者に許される呼び方だ。

どこぞのアハウ御曹子のフルル等とはまるで違う事が伝わればよ

いが。

どうでもいいが、背後が寒い。

・
・
・
・
・
・
・

彼女が本格的に夜露と呼ばれるまでは、彼女はわたしの「綺麗な
お嬢さん」なのだといふ心の中で主張する。

距離を測りかねる二人（前書き）

26話の後の～

距離を測りかねる二人

→26話のちょん切った後話。

「ありがとうございます」

私のためにと用意された部屋の扉の前に着いた。
だからお礼を言う。

やっと着いたと思った。

それなのに、もう着いてしまったとも思ってしまった。

地主様に運んでいただいた。

長い廊下も階段も、この方にかかればどつってことはない。
その事実が思い知らされた。

心苦しくもあるし、彼に対しての賞賛も湧く。

このお方は強くて優しい。

「地主様？」

扉の前で立つたままの地主様に、どうかされたのかと問い掛ける。
もう下ろしてくださいださればそれで済むだろうに。

「カルヴィナ、手を」

ああ、そうか。

私がつつく地主様に縋っていたから、悪かったのだ。
両手を緩めた。

無意識とは言え、恥ずかしいと思った。

「申しわけありません」

「いや、違う。扉を開けるからもっとしっぴかり？まってる」

「？まる？」

どこにですかと問い掛けるよりも早くに、彼の大きな手が背をしっぴかりと支えた。

身体が少し浮き上がり、視界が変わった。

落ちるかと思った。

慌てて地主様の首筋に縋った。

また荷物を抱え上げるようにされたのだ。

横抱きであったのを正面から抱きかかえ直され、どうしたものかと悩む間に地主様が扉を開ける。

きいと音が響く。

彼が一步踏み出したから、思わずぎゅうと抱きついてしまった。

「カルヴィナ。おまえを寝台に運ぶだけだから、そう怯えてくれるな。他には何もないと誓う」

背をぽんぽんとあやすように叩かれた。

まるで子供にするみたいだと思った。

何も無い？ 誓うって何をだろっ？

（お説教しないって事かな？）

私がまた怒られると思って、怖がったのかと思われたのかもしれない。

黙ったまま頷いた。

月明かりだけが頼りの室内は静まり返っている。

地主様はゆっくりと慎重に私を寝台に下ろす。

身体が離れる間際、彼の口元と顎が私の額を掠めた。

先程閉じた目蓋の上から感じたように、少しだけちくりとしたのは彼の髭が触れたからのようだ。

「ゆっくり休め」

そう囁いて頭を撫でてくれた大きな手が、そのまま流れるように頬を撫でて行く。

「はい。お休みなさいませ、地主様」

頷くと大きく頭を撫でられて、そのまま寝台に押し倒されてしまった。

「あの………?」

「もう、休め」

地主様に言われるまま瞳を閉じた。

身体をシーツに包まれるのを感じた。

やっぱり子ども扱いだ。

地主様は面倒見が良いようだ。

そのまま心地よく眠りにつく事ができたから、地主様がいつ戻られたかもわからなかった。

・。・：・*・：・。・。・：・*・：・。・。・：・*・：・。・。・：・*・：・。・

がする。 夢うつつの合間に、頬にもちくりと刺さる感触があったような気がする。

オークの実がみせた夢（前書き）

40話のその夜

オークの実がみせた夢

カルヴィナが俺の手のひらに、オークの実をのせた。

白く小さな指先が掠める。

この実は特に大きいからどうぞ。

等と、カルヴィナが得意げに言う。

いつにない笑顔と共に。

再び実を拾おうと引かれた手を、そのまま掴み引き寄せた。

せっかくの木の実は地面に転がる。

男と二人きりで、無防備にそんな笑顔を見せ付ける方が悪いのだ。

。。。。

華奢な身体を腕に閉じ込めるのは、容易い。

ふいにこみ上げた愛しさが、欲望を帯び始める。

愛おしさは苦しいほどで、出口を求めてさ迷った。

オークの木の実の恵みの雨に打たれたいと、無邪気に願った唇を塞いだ。

次いで、口元のほくろに、首筋に、鎖骨の下に、胸元に

口付けの雨を降らす。

すまない、許せ。

俺は男だから……。

どうしたって、こうやって慰めてもらいたいと願う時がある。

震える耳元に吐息ごと囁く。

我ながら何ていういいわけかと思う。

でも彼女を求める気持ちは止まらない。

止めよう、止めなければ彼女を傷つける。

それは嫌というほどわかってる。

だが、止まらないのだ！

彼女のすすり泣きが耳朶を打ち始めている。

それですら心地よくて、彼女の身体を味わう事にのみにしか思考が向かない。

我ながら末期症状だと思う。

このまま彼女を自分のモノにした瞬間に、彼女を失うとはわかってはいても、獣は留まってはくれないのだ。

乾いて乾いてたまらないのだ。

空腹で飢えた獣。

淡雪を口に含むかのごとく、その感触は頼りなく、現実味が無かった。

余計に飢えは募るばかりだ。

だからといって飽きる事も無く、ただひたすらにその淡雪を求め続けた。

耳元で聞こえるすすり泣きに、獣は凶暴さをむき出しにして行く。

。。。

。。。

眩しさに、無理やり瞳をこじ開けるようにして目覚めた。

朝だ。

気だるさを引き摺りながら、身体を起こした。

寝起きは悪い方ではないはずだが、今朝は違った。

夢見が悪かったのだろう。

眠りが浅かったようだ。

昨日カルヴィナがくれて寄こしたオークの実が、何故か枕元に置かれていたのに気がつく。

いつのまに？

夢と同様、記憶に無かった。

オークの実をつまんでみる。

何かひどく甘いものを口に含む夢だったと思う。

そのせいなのか、やたらと咽喉が渴いていた。

。。

。。

オークの実がみせた夢（後書き）

夢って願望が現れるって言うよね、レオナルド？

夢オチでした〜。

お祭りまで、あと五日。(前書き)

42話後)

お祭りまで、あと五日。

「行っちゃったね」

「うん」

「私たちも帰ろうか」

「そうだね」

「ねえ、ミルア。もし、もしもよ?」

「何よ?」

「両方じゃなくて、どちらだけと答えたら、エイメは何を教えてくださいなと思う?」

「人の心は曲げられないって言っていたものね」

「……じゃあ、身体の方は」

「」「」……………」

。。。。。

きゅん !

娘たちの歓声が聞こえてくる。

「あゝうるせえな、女たち。主にミルア」

「いいじゃないか、華やかで」

「俺はあつちに混ざりたいよ」

「ジエスだってそうだろ?」

。。。。。

男たちがいつの間にか、大声をあげている。

「うるさいわね。主にジェス」

「いいじゃない。楽しそうで」

「はいはい」

「もう！ ミルアのイジワル！」

祭りまで、あと五日。

あなたの猫に嫌われ度 チェック(前書き)

なんだ、このタイトル……。

ひとり、シッコミます。

あなたの猫に嫌われ度 チェック

「なんだ？」

「該当する項目に丸を付けて提出？」

「誰についてリディアンナに？」

「そのようですね」

何の事が。

あなたの猫に嫌われ度・チェック。

- 1・男性である。
- 2・急に大声を出す事がある。
- 3・急に触ってしまう事がある。
- 4・急に抱き上げてしまう事がある。
- 5・言う事を聞かないからとイライラしてしまう事がある。
- 6・眠っている最中なのに、許可無く触ってしまう事がある。

7・犬に慣れるようにと強要した事がある。

8・毛並が黒いとなじった事がある。

9・食事の量が少ないからと、無理やり食べるように強要する事がある。

10・そつとしておいて欲しい時も、無理にでも自分が構いたければ構う主義だ。

11・部屋に閉じ込めて、自由を奪おうとする。

「ええと、該当項目はいくつでしたか？ また、何番でしたか？
だつてさ。ええと〜」

スレン・「俺は〇4つ。1・3・4・10だねえ。まあ、希望を述べるなら全項目してしまいそうだけど。」

リヒヤエル・「わたしは、一つです。1番の男性であるが、該当項目ですね」

レオナル・「……。」

スレン・「良かったね、レオナルは満点でしょ！ 完璧、猫には嫌われるタイプだね！ あれ？ レオナル、無反応って、おい！」

スレン・「行っちゃったねえ」

リヒヤエル・「そうですね。まだ仕事が残っておりますから」

スレン・「性懲りも無く、猫を構いに行ったの間違いじゃないの
く？」

おしまい。

シュリから見た魔女の娘（前書き）

42話 後 くらいです。

考えた事もなかったから。

「エイメはいつもそうして、その。男の人を惹き付けているの？」

そう尋ねたら、きょとんとした顔をされてしまった。

「どうして？」

「どうしてって……。」

エイメはいつだって男の人の注目の的だから。

「？」

「うん。何というか、エイメ。自覚は無いのね？」

「自覚？ 何の？」

小首を傾げるを通り越し、捻り始めたエイメを見やった。

そこには何の含みも感じられない。

皆で顔を見合わせた。

ミルアは一人、力強く頷いている。

「そうなのよねえ。タチが悪いつたらないわ！」

「ミルアの言う事はいつも意味がわからない」

厨房の隅で何かが壊れる音が響いた。

祭り前夜のロウニア家（後書き）

がっしゃん！ したのは誰でしょう？

ヒント 厨房の素直でない料理人。

ってか答えですね。

祭り前夜の決闘

～52話のこぼれ話 一角の君VS地主～

『人の子というのは脆い。ましてや娘となると……。脆い等といものではないのだぞ!』

森の娘を家に送り届けた後、当たり前のように続こうとする男に体当りを喰らわせた。

男はよろめき、戸口に両手を付いていた。

油断大敵だ、愚か者め!

いい気味だとせせら笑いながら、足を勇んで踏み鳴らす。

『承知している』

『どうだか!』

『そういう貴様こそ、わかっているのか?』

挑戦的な物言いの若造に、全身の血が逆流した。

しかも我々の言葉を操りおる!!

こやつ！ こやつ！ こやつめ！

カンッ！ カンッ！ カンッ！！

夜の森の中に、渡り合う剣と一角の音が響く。

森の深さに吸い込まれて行く。

ガッ！！

一際強く踏み込んでやった。

全体重をかけて。

我が一角と剣を交えても、ビクともしない男を睨みつけた。

我が愛しの花嫁となるべく娘に無体を働いた男！

ふてぶてしい態度に、固く筋張ったカラダに、低く野太い声。

私の好む乙女らとは、何もかもが全く違う。

これだから男というものは嫌いなのだ。

『カルヴィナを脅しているのか？』

『何？』

今、聞き捨てなら無い事を。

どこまで無礼なのだ！

我が一角で散らしてくれ。

『契約とは何だ。カルヴィナは怯えていた。貴様を怒らせると何を
するか解らないから、と漏らしていた』

『怯えるだと？ 嘘をつくな！！』

男は視線を逸らさない。

真っ直ぐに挑んで、切り込んでくる。

『カルヴィナを傷つけるのは許さない』

『それはこちらの科白だ！』

夜が明けるまで、この無礼者との問答は続いた。

地主と一角。やり場の無い（有り余っている）エネルギーをケ
ンカで発散。

レオナル、徹夜。 いや、仮眠くらいとった様子。

祭り前夜の決闘（後書き）

一角 VS 地主

しょうもない一騎打ちという名の、お互いの八つ当たりで

夜も更けて行きました。

カルヴィナは夢現で 「こんなに夜中に誰か木を切っているのかな？」

と、闇夜に交わる一角と剣の響きを聞き流したようです。

祭り当日の朝

さあ、さあ！

祭りの日の朝だ。

何と晴れ渡った空。

最高の祭り日和。

そんな浮かれた気分で、エイメの家を訪れた。

。。。。

「おはようー！ じいさま……す？」

元気一杯、挨拶をしたのだが。

当然、同じようにサワヤカな笑顔と共に、挨拶で迎えられと思っただが。

「ああ

「お、はよう」

すっごく、投げやりとも言える口調の地主様と、泣き出しそうな口調のエイメに、流石に怯む。

。。。。

しかも。

エイメが。

エイメの様子が、そのう。

(ど、どうしちゃったんだよう、エイメ！)

思わず胸の辺りを押さえてしまった。

少しはれぼったい目元を伏せながら、遠慮がちにこちらをみてきた。

その瞳が潤んでいて、切なげで。

加えて、赤く色づいている唇が、何か言いたそうな様子は悩ましげで。

それでいて、押し黙る風情が醸し出す雰囲気、儂げで。

(え？ え？ ええええええええ！?)

か、かわいいっていうか！

綺麗っていうか！

どっちもっていうか！

色っぽいつていうのが、一番しっくりくるよ!?

どういうこと？

地主様も一緒のご感想のようだ。

エイメは気が付いちゃいないようだが、地主様は君の様子を窺っているよ！

こっそりとね。

それくらい、エイメを直視するのは憚られた。

女の私でさえ、何やら心臓がうるさく騒ぎ立てるのだ。

(地主様やジエスなど、ひとたまりも、なさそうだね、これは)

一晩で何がどうなったら、こんなに様子が変わるのか。

知りたいと思うのが、当たり前ではないか!!

。。。。

そんな想いを眼差しに込めてみた。

まずは地主様を。

はい。

無視された。

と、いうよりも、ワタシの事は眼中に無いって感じ。

やっぱりね？

これは早い所、エイメを地主様から隔離してあげない事には、どうにもならないと思ったよ。

二人きりになったら、切り出そう。

「どうかしたの？」って。

エイメは絶対、泣き出すだろうなあという予感がしている。

祭り当日の朝（後書き）

『おっはようございま〜……。』

す。

勢い良く迎えにきて元気よく挨拶してみれば。

挨拶も尻窄みですわ。

ミリアの予想通りでございます。

やぐらの二人を見つめる者

目の前に横たわるのは、かつて見た希望の光。

真白き魂。

我の。

我の傍らにと約束してくれた娘　？

潤んだ瞳に訴えかけられ、その存在をとくと見た。

我と同じ闇色の属性。

それでもその娘の持ち放つものは、純白で輝いている。

ああ、そつだ。

やはりこの娘は我の光。

闇にも溶けない愛しの者。

荒ぶる我の牙の前にも、恐れず腕かいなを差し出した者。

娘は涙をたたえた瞳で我を見つめている。

それに怯む己に気がつく。

泣かないで欲しい。

泣かせたいわけではない。

微笑んで欲しい。

願いはただそれだけ。

そう願うのに、それとは相反する願いもわく。

この娘の全てを我のものに、我のものに、我のものに。

組み敷き想いのまま貪り、我を刻み込んでやればいい。

そうだ。

この光は我のものなのだから。

想いのまま突き動かされ、伸ばしたはずの腕が止まる。

獣に待てと言ってくるのは、紛れも無く我が身の内からだった。

身の内？

疑問に思った。

我は、我だ。

我は……？

『シュディマライ・ヤ・エルマ？』

娘が呼んでくれた。

そうだ。

疾風まとう暗闇という名の獣。

『シュディマライ・ヤ……』

『違う』

何を言う。

我は。そう我は……？

『呼んでくれ、カルヴィナ。俺を呼び戻してくれ』

娘は小さく頷いた。

そうだ。

我の名を呼んでくれ。

祈るような気持ちで、瞳を伏せた。

その時だった。

額にあたたかさが伝わった。

娘がそっと口付けてくれたのだ。

祈りを込めて。

(シュディマライ・ヤ・エルマよ。どうかお鎮まりください。あなた様の光にみちびかれますように)

。。。。

『レオナル様』

違う。

『ザカリア。レオナル・ロウニア』

違う。

我は、そなたの獣だった。

真白き光。

だが、彼女もまた違うのだ。

静かに慈しみを込めて呼ばれ、隅に追いやってやった男の意識の方が存在を主張しだす。

もはやこの身にしがみつくのは敵わない。

娘が見つめるのは、我ではない。

ザカリア・レオナル・ロウニアとやらなのだから。

そつとそこから離れ、浮き上がる。

見下ろせば口づけ合う、人の子の姿があった。

この男もまた、ただの獣からそうで無い者に少し近づけたのだ。

乙女という存在はいつだって、我らの牙をないものに等しくしてくれる。

。。。。

我の真白き光よ、どこにいる？

優しく吹く風に誘われて舞い上がった。

レオナル、気がつかなかったけど魔女っここからデコちゅうもら
ってました。

仮面越しだったしね。

気づかれていたらそりゃもっと違う展開に……？

あわわ。

やぐらの二人を見つめる者（後書き）

『シュディマイ・ヤ・エルマ目線の小話』

誰かが見ていたり、するものではないでしょうか？

いつ、何時でも。

魔女の食事風景（前書き）

……に悶える周囲の人たち。

そんな風が続いた仮タイトル。

私は必死に食事を取る子を……。

あとがきに続く。

魔女の食事風景

両手を組み、静かに祈りを捧げる。

食事を前に感謝を捧げるといふよりも、決死の覚悟を定めたかのように見える表情だった。

浮かれた様子など微塵も無いとはどういう事か。

いつも咎めたくなるが、黙っている。

そんな事をしたら最後、この娘が全く食事を取らなくなるのは簡単に予想が付くからだ。

自分よりも椅子二つ分向こうの、ななめに席を取る娘を横目で窺いながら杯を呷った。

カルヴィナも、リディに勧められるまま杯に口を付けた。

食前酒は俺には甘すぎる物だが、娘の口には当たりが柔らかそう。そう思われた。

だが、カルヴィナは僅かに眉をしかめると、すぐに杯を置いた。申しわけ程度に舐めただけだ。

その時点で訳も無く腹が立った。

もちろん、そんな想いは腹の奥底に沈める。

気を取り直し、目の前の食事に集中しようと決めた。

ナイフに手を伸ばすと、微かに娘の肩が跳ねた。

そんな娘の、僅かな気配にすら反応する自分にも腹が立つ。

俯き加減で小さくなっているカルヴィナが、何故こうも存在を主張してくるのが解らない。

ただただ、不快だった。

カルヴィナが匙を手に取り、野菜を煮込んだシチュウを口に運んだ。

のろのろと。

娘の口に運ばれる前に、匙の半分以上は元の皿に戻っただろう。そろそろとシチュウをすくうと、また同じように繰り返した。

もたもた、のろのろと、娘は食事を取る。

何がそうさせるのか、必死の様子だった。

いつその事、俺が食わせてやった方が早いのではないか。

ちなみに俺は、すでにあらかた食べ終えている。

その事に気が付いたのだろう。

カルヴィナが慌て出した。

まだ口いっぱい頬張ったまま、飲み下せていないのに、次をと口元へと運ぶ。

もちろん、まだ口は空いていないからそのままだ。

もぐもぐやっている間に、匙のほとんどがまた、皿へと滴り落ちた。

それでもカルヴィナは気を取り直し、再び勇んでシチュウをすくった。

今度は開けた口より、匙にのせた具が大きかった。

ぼたぼたとこぼす。

唇の端も汚れた。

困惑顔のまま、必死で咀嚼するカルヴィナに、今話しかけたらどうなるのか。

見ものだろう。

そんなささやかなイタズラ心を押し込めるように、杯を呷った。

「そろそろデザートをお持ちしましょうか？ リディアンナ様。…お嬢さま？」

給仕のその言葉が、カルヴィナを追い詰めたらしい。

カルヴィナが困惑を通り越し、絶望的だとしても言い出しかねない悲壮感を漂わせる。

何せ皿には、まだシチュウが残っている。

それにパンと、たどりつけていないがメインの肉料理が並んでいる。

「カルヴィナ。残りは叔父様が食べて下さるわ」

邪魔をしないようにだろう。

黙っていたリディが、厳かに言った。

「ねえ、レオナル。フルル、もらって帰っていい？」

同じく珍しく、黙って食事を進めていたスレンが言った。

「ふざけるな」

「いやあ。この「何でこんなに小動物みたいなのかな。ボクが飼いたい」

まじまじとカルヴィナを見詰めながら、しみじみと呟く。

そんなスレんの足に、迷い無く蹴りを入れた。

「叔父様が見すぎるから、カルヴィナは緊張して食べられなくなるの！」

そうリディアンナからなじられた。

魔女の食事風景（後書き）

『続き。』

何て愛しいのか、と眺めていましたよ。

作者、食い意地がはっておりますから。

幼い頃から食べる、食べる。

給食を食べきれなくて困っている子の分は、引き受けていたし。

御代わりは絶対！

休んだ子のデザート争奪戦のジャンケンは、ふるって参加。

女子はお前だけだ。それがどうした。

ただし、牛乳だけは飲んでもらってました。

必死で食べようと苦しんでいる姿を楽しんでから、恩着せがましく
みつな登場！

いい思い出です。

未だに褒められ（けなされ）ます。

少食の子にあこがれます……！ きゅん。

初めて出会った日

『エイメ、エイメ』

『おばあちゃ………!』

大魔女の後に続いて行った先に、居たのは。

黒い髪の娘が、大魔女の呼びかけに振り返った。

そうして見開かれた瞳も黒。

初めて見る色味を持つ娘だった。

大魔女のカラス娘。

良くも悪くもそう呼ばれる娘の存在を耳にはいた。

だが、大魔女は俺が訪れるとなるとそれとなく、娘をどこかに使いにやってしまう。

こちらから娘の存在を尋ねた事も無かったし、ばあさんから同じだった。

そうやって一年以上経った今頃、大魔女が俺と娘を引き合わせるのか大体の察しは付く。

大魔女が乾いた咳を押し殺すようにしながら、娘に歩み寄った。

『このヒト誰？ おばあちゃん？』

呆けていた娘はゆるゆると小首を傾げると、そう尋ねた。
俺にはなく、大魔女の方に。

『大地主様だよ。ちゃんと挨拶おし』

『おお、じめし、さま？』

娘はたどたどしくそう繰り返した。

まるで初めてその言葉を知ったかのように。

きよとんとした表情が、なおのこと娘を幼く見せていた。

「はじめまして、大地主さま。大魔女の娘でございます」

俺にわかるようにと気を使ったのだろう。

娘は古語ではない言葉を発した。

ぺこりと頭を下げる。

地べたに座り込んだままで。

『エイメヤ、靴と杖はどうしたね？』

『脱げちゃったの。ねえ、それよりも見て』

娘は得意そうに籠を差し出した。

『きのこ取ったよ。雨上がりだから、たくさん取れた。今日は火で炙って夕食にしよう』

『あれあれ、エイメ。その雨上がりの場所に座り込んだのかい！』

見れば娘のスカートの裾は汚れていた。

娘は構わないタチらしい。

そう思ったがよくよく見るとどうやら違つようだ。

転んだから、もういいと諦めたらしい。

汚すに任せたといった所か。

『エイメ、もう戻るよ。日も暮れてきた』

その無邪気な様子に何故か、苛立ちを覚えた。

魔女の娘は大魔女しか目に入っていないようだ。

祖母と孫娘だけの穏やかな暮らし。

間に誰かが入るなどと考えもしないのだろう。

『大地主さまは、その……。怒っているの？』

口調は明らかに大魔女に向けられたものだった。

だが、俺はすかさず答えていた。

古語で。

『そうだな。どこかの大魔女が税を納めようとしなからな』

俺が古語を解するとは思わなかったのだろう。

俺が反応した事に驚いたようだった。

古語を解するものは少ない。

それは失われつつある言葉だからだ。

それで会話をするという事は、古語を知らぬものは会話に入れな
いと言っているにも等しい。

不愉快だった。

もう少し素知らぬフリをして、この娘に本音を語らせてやれば良
かった。

それから俺が古語を解するのだと明かし、慌てさせてやれば見も
のだったろうに。

娘はそれきり黙り込み、俯いてしまった。

三 三 三

いったん大魔女の家へと戻り、暇を告げる。

『じゃあな、ばあさん』

『ああ』

『あのう』

意を決したように娘が口を開いた。

おずおずと籠を差し出す。

『どうぞ、これをお持ち帰りくださいませ、大地主様』

驚いたため、反応が遅れた。

確かそれは二人の夕食になるのではなかったか。

雨上がりの中、収穫したきのこ。

差し出された籠に、手を伸ばすのはためらわれた。

娘をただ、バカみたいに凝視することしか出来なかった。

手を伸ばしたら簡単に触れ合える距離が、俺をためらわせる。

この娘を連れ帰りたい。

そうして森の外の世界を見せたい。

そうしたら、どのような反応を見せてくれるだろう。

思わずよぎった考えを、頭の中だけでふり払った。

『エイメ、いいから。着替えておいで』

間に大魔女が割って入ると、籠を俺には渡さず床に置いた。

娘は頷くと挨拶もそこそこに、部屋の奥へと引っ込んだ。

振り返りもしなかった。

その背を目線で追いながら知らず、拳に力が入っていた。

ミ ミ ミ

『大地主様。エイメはやれないからね。この婆の目が明るい限りは』
大魔女が厳かに告げた。

初めて出会った日（後書き）

魔女っこ 16歳くらい手前。

自分は長くないと悟ったから。

地主、この時点で既に、借金のかたにしてやろうかと考え始めてるし。

魔女によるカード占い（前書き）

後半に書き足しました。

魔女によるカード占い

魔女つこによる占い。

「カード占いよ」

「リディアンナは先視が出来るだろう？」

「それは占いとは言わないの！ もう、叔父様ったらロマンがないわ」

「何を占いましょうか？」

「えっと、じゃあ、レオナルの恋愛運をおねがいしよう」

「スレン。何故、お前が俺の事を言い出すのかわからん。」

「友情からに決まっているじゃないか」

「ええと。では、このカードを混ぜてから、一枚引いてみて下さい」

「カルヴィナも真に受けるな」

「いいじゃない。続けてよ？」

「わかった。では占ってもらおうとしてあげよう」

「はい。わかりました」

「地主様の引かれたカードの意味するところは、その」

「何だ？」

カルヴィナが頬を染めながら、言い淀む。

手元のカードの絵柄は一人の女性が頭上に果物の入った籠を捧げながら、雨に打たれているというものだった。

その足元には犬と一緒に雨に打たれ、女性と一緒に水たまりを羽回っているようだ。

雷も落ちているが、花も舞っている。

奇妙な絵柄が示唆するところは何なのか。

続きを促す。

「これは、恋の喜びを意味するカードです」

覚悟を決めたかのように、カルヴィナは説明し出した。

「雨に打たれながらもこの女性は笑っています」

「収穫を頭に乗せて、足は裸足で踊っています」

「例え雷が鳴り響くとも、恋の沸き上がる喜びを謳っています」

そんな女性の訪れを意味しています。

そう、厳かに締めくくられた。

「きっと地主様は想う方と一緒に、生きて行かれると思うのです」

そうカードが告げるままに伝えた。

「そうか」

静かに見つめられて、思わず俯いてしまった。

何となく、恥ずかしい。

カードを眺めていると、頭を撫でられる。

「俺の……。」

「はい？」

「俺に人生の喜びを運んでくれるらしい、その女神は黒髪だろうか？」

魔女によるカード占い（後書き）

「魔女つこによる本日の運勢」

そんな軽いノリのつもりが、何やら重くなった。

作者、占いは縁で行くことが多いです。

やたらと。

自分からは望まないのに 「紹介以外視ない人なんだけど行ってみて！」

というパターン。

占いは結局、自分で自分の心の中をのぞきに行く作業だなあと思うのですよ。

人生を見つめ直す良いチャンスかもしれない。

祭りの夜に

「祭りの夜も更けた後」

規則正しい呼吸が心地よくも悩ましい。

カルヴィナ、と諦めながらも呼んでみた。

やはり返るのは小さな寝息だけだった。

このまま、強引に事を進めて奪うことは容易い。

だがそれは、一方的にケダモノが獲物を食うだけの行為に等しいだろう。

カルヴィナに刻みつけたいの、そんなおぞましい恐怖ではない。

俺を刻みつけてやりたい事に変わりはないが、間違っってはならない……。

そう何度も己に言い聞かせながら、やわらかな身体から離れる事に成功した。

今夜を決めるしかない薬酒のせいで、火照る体を持て余す。

鎮めるためにも湖へ向かった。

昨晚、カルヴィナが生まれたままの姿を晒していた場所だ。

「……………」

無心だ。

この湖のように静かな心で、満月を映すごとくであれ。

そう唱えながら、上着を脱ぐ。

下履きだけで湖に足を浸した途端、突風が吹き抜けた。

「む！ 何用だ、人の子風情が我の許可なく！」

「一角」

「地主とやら。また貴様か！」

「悪いか」

「おおいに。我の湖に入っているのは乙女だけだ……こら！ 話しを聞かぬか」

無視して湖に身を沈めた。

「カルヴィナに魚を食わせてやりたい。その為に罾を仕掛けに来た」

「許す」

嫌にあつさり許可がおりた。

『しかし、地主とやらは許さぬ。だが、その腕輪を我に寄こすのなら考えてやる』

一角は目ざとく赤い石の飾りを見つめていた。

『やらん』

『寄こせ』

角を振り上げて威嚇する奴を見つめ返した。

『これはカルヴィナが、俺へと想いを込めて作ってくれた物だ』

『だからこそ、寄こせ』

『やらん。虚しくはないか？ 一角の』

『……！』

湖の淵で地団駄を踏む一角をしり目に、罨を仕掛け終える。

『私の湖から上がれ！ そして勝負の続きだ、地主とやら！』

『言われずとも、望むところだ』

そうして昨晚と同じく、一角との渡り合いで夜も更けて行つた。

祭りの夜に（後書き）

『火照った体を』

祭りの小話。

前後しちゃいましたね。

勇者ごっこ。

巷じゃ子供たちの間で、勇者ごっこが流行っているらしい。

「よしてきた　じゃあ、配役は僕がするね」

・ノリノリです。スレン。

「……はいやく？」

・よく分かんないけど、スレンが楽しそうなのでのってみたカル
ヴィナ。

「はい、フルルはもちろんお姫様かな？」

・聞いているようで聞いちゃいないスレン。

「おい」

・見ちゃおれん。とばかりに口を挟んだレオナル。

「レオナルはもちろん魔王ね。あ、やっぱりドラゴンにしようっ！」

・スレン、言ってもものすごいピッタリな気がしてきている。ド
ラゴンなレオナルっていかすよね。

「何の話だ」

・本当は疲れるから関わりたくないレオナル。棒読みです。

「うん。やっぱり、リディアンナがお姫様役にしよう」

・一人の世界に入りつつあるスレンの暴走は続く。

「まあ」

・スレン様だったらいつまでも子供みたいと、優しい姉という生きもののリディアンナ。

「そうしたら、フルルは魔法使いにしよう。魔女だし」

・俺、冴えてる！ とばかりにスレンはカルヴィナを指さす。

「魔法使い……！」

・何か格好いい！ と思ったらしいカルヴィナ。嬉しそう。

「お。気に入ってくれたみたいだね。じゃあ、僕と一緒に魔王討伐の旅に出よう！」

・力強く言い切るスレン。

「スレン、いい加減にしろ」

・もうこのくらいで止めないと、と思っ管理職気質のレオナル。

「スレン様は何の役ですか？」

・生温かい笑みを浮かべながら、リディアンナ。まるつきり子供を見る目です。

「決まっている。勇者」

・びしつと親指で自分を指して。無駄に髪をかき上げてもみる。

「「「……。「「「」

・カルヴィナ 勇者って何だろう？

・レオナル 誰かこの馬鹿につける薬をくれ。

・リディ 必殺 生ぬるい笑み継続中。

勇者じっし。 (後書き)

『ノーコメント。』

ふざけていてすみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4787s/>

大地主と大魔女の庭園

2011年12月21日05時57分発行